

# ちよひとてい話

第二二二号

娑婆の苦楽

人間には生みの親、あるいは育ての親と呼ぶ両親があります。事情があり止む無く片親と言う方も見えます。何れに致しましても子育ては大変です。恵心僧都のお母さんが我が子に贈った詠があり、**ます うちの世を渡す橋ぞと思いに、世を渡る僧となるぞ悲しき**と、世間で名前が知れ渡って来た実情を手紙にしたため母親に届けたのですが、母からの返信が前の御詠でした。母は妙利名聞を喜ぶ我が子を叱責したのです。又、嵯峨に釈迦堂 清涼寺」というお寺が御座います。寺の御本尊様はもちろん釈迦如来様でございます。藤原時代に奄然と言う僧が中国から持ち帰った佛様です。この奄然のお母様が、恵心僧都のお母様と同じ様に偉かったのです。母親の健康を心配して、宋に渡るのを躊躇する奄然にお母様は、**法縁は俗縁を超えるものと論し**、宋へ渡る事を勧めました。奄然は生み育ててくれた、高齢になられた母親が、自分が宋に居る間に命終を迎える事に成るかもしれないと思ひ、四十九日の法要を済まされ宋に渡られました。勿論、奄然は無事に帰国されました。**時として母親の身を切る強さが子供の成長に必要なものかもしれません**。行基菩薩の作と伝えられる句に 中鳥のほろほろと鳴く声聞けば父かと思ふ母かと思ふ」と、叱られても懐かしく思い出されるのが父母の声です。父母恩重経に 佛の五戒を奉じ、仁ありて殺さず、義ありて盗まらず、礼ありて淫せず、信ありて欺かず、智ありて酔わざれば、即ち家門の内、親は慈に、子は孝に、夫は正に、妻は貞に、親族和睦し、・・・庶民万姓まで、敬愛し、・・・ここにおいて父母、現には安穩に住し、後には善処に生じ、佛を見、法を聞いて、長く九輪を脱せん。かくの如くにして、始めて父母の恩に報ずる者と為すなり。」とあり、**父母に孝を尽くせば家門の安泰、六道からの脱却と良い事** 尽くめなのです。高田好胤師は「安」という字は家に女がおさまっている姿だと申され。母親が家にいるからこそ家庭もやすらかになる。と話しをされています。現在は政府も女も外に出て働けと言っています。果たして家庭が上手く収まるでしょうか。国民は皆、赤ん坊に至るまで国の借金を背負っています。その上に自分の借金もあれば、明るい明日はず、愚か者と呼ばれるかもしれません。国の借金は背負わされるが、**自分の借金は国が背負ってくれませんか**。行動は慎重に見極めて下さい。老子は徳育の教えとして道、これを生じ、これを畜い、これを長じ、これを遂げ、これを享し、これを毒し、これを養い、これを覆う。生じて有さず、為して恃まず、長じて辛さず、これを玄徳という。」そして、自らを知る者は明なり」と締めくくるのである。有名な漢詩に 少年老い易く、学成り難し、一寸の光陰、軽んず可からず、未だ覚めず、池塘春草の夢、階前の梧葉、已に秋声」と。春眠からさめればもう秋、早いです。「日は再び晨になり難し、時に及んで当に勉勵すべし、**歲月、人を待たず**」と。私は殺生の一番は時間の無駄遣いにある**と思っています**。誰も一日は二十四時間です。同じ時間ならば能率を高めるのが当たり前です。還暦を過ぎれば動作が鈍り、効率は下がります。若い中に時間を貯めておくことは老いて行く上で作る、殺生のマイナスを補う為にです。

二十九年十月一日

善壽界善入院掛地藏尊